

風景の句読点

Punctuation of Scene

第9回

ヨシが茂る谷津干潟

谷津干潟

埋立地に残された生き物の楽園
(千葉県習志野市)

住宅地に囲まれた干潟

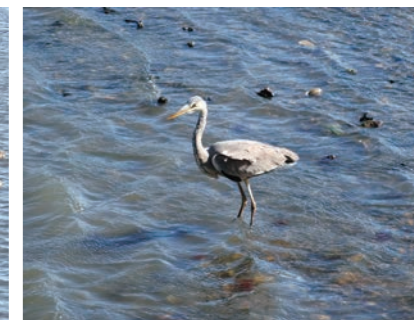
千葉県北西部に位置する習志野市は、市の南西部が東京湾に面している。その海岸線から少し内陸に入ったところに谷津干潟が広がっている。面積は約40haで四方を埋立地で囲まれており、住宅や学校などが立ち並ぶ。干潟の東西にある2本の水路によって東京湾とつながっており、潮の満ち引きの影響も受ける。そのため干潟にはプランクトンやエビ、カニ、貝、ゴカイ、魚など海の生き物が多く生息しており、それらを狙って多くの鳥がやってくる。渡り鳥のシギやチドリ、カモの仲間だけでなく、子育てする鳥、一年を通して見られるサギやウなど、その種類は実に様々である。

「風景の句読点」は、私たちの心に句読点を打ち、思わず足を止めたいような素晴らしい風景について、その成り立ちや魅力の源泉を紹介するコーナーです。

基礎地盤コンサルタンツ株式会社 / 技術本部 / 物理探査部
佐々木 勝 SASAKI Masaru (会誌編集専門委員)



干潟に浮かぶカモ類の群れ



獲物を狙うアオサギ

谷津干潟の歴史

かつて東京湾の最奥部、現在の東京・千葉の沿岸部には広大な干潟があった。この遠浅の海岸を利用して塩作りが盛んに行われており、谷津でも明治～大正時代にかけて塩田が開発された。1925年に現在の京成電鉄がこの地を買収して谷津遊園が開園した。1982年に閉園するまで多くの人々に親しまれた。

1940年には谷津遊園を除いた谷津干潟を含む土地を、利根川放水路整備のために当時の大蔵省が買収した。その後、この整備計画は中止となったが、谷津干潟の土地は国有地であったため、周囲が埋め立てられ開発されるなか、谷津干潟はそのまま残された。その結果、現在のような住宅地などに囲まれた干潟となった。

ラムサール条約湿地

住宅地のなかに取り残された谷津干潟は、ゴミの不法投棄やそれに伴う異臭が顕著になると、埋め立てようという機運が高まっていった。習志野市も埋め立てて住宅地にする計画を立てていたが、干潟の重要性を唱え自然環境の保護を求める市民運動などもあり、市は埋め立て計画を撤回して干潟の保存と環境整備を行うこととなった。1993年に「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約(ラムサール条約)」に登録され、翌年には自然観察センターを含む谷津干潟公園が整備された。

未来に向けて

谷津干潟に飛来する野鳥は種類・数ともに年々減少しているとの報告がある。近年では干潟内にアオサが繁茂しており、アサリやゴカイなどの底生動物の減少や水質の汚濁などが危惧されているため、継続した保全が必要とされている。

習志野市ではラムサール条約の登録日にちなみ、6月10日を「谷津干潟の日」に制定して、市民と行政が協力して保全を図ることを目的にイベントを実施している。自然観察センターでは地域の小中学校などと連携して様々な環境教育プログラムを実施しており、干潟の保全に対する意識を次の世代へとつなげている。

谷津干潟の周囲には遊歩道が整備されており、散歩やジョギングをする人が多くいる。干潟を見ると小魚の群れがおり、それらを狙っているのかアオサギなどが浅瀬に佇んでいる。干潟に茂るヨシの中からガサガサと音がして、見ると小鳥たちが戯れている。こんな風景が今後も残っていてほしいと切に願う。

<参考資料>

- 1) バンフレット「習志野市谷津干潟自然観察センター」谷津干潟ワイルズユース・パートナーズ、2018年
- 2) 「谷津干潟(船溜り・三角干潟)における水質・生物・水環境健全性調査」村上和仁ほか、「千葉工業大学研究報告」No.64、2017年
- 3) 谷津干潟自然観察センター(谷津干潟公園センターゾーン)HP (<https://www.seibu-la.co.jp/yatsuhigata/about/>)
- 4) 習志野市HP (<https://www.city.narashino.lg.jp/index.html>)
- 5) 環境省ラムサール条約と条約湿地HP (<https://www.env.go.jp/nature/ramsar/conv/>)